気になる企業姿勢の乱れ

財中小企業総合研究所 主席研究員 坂東輝夫

私事で恐縮だが、第一次ベンチャー・ブーム時に活躍した仲間と語らって、第一次ブームの際に話題になった論文を集めた冊子をまとめて、最近発行した。第一次ブームとは1970年前後のことを言うが、その当時にベンチャー企業がどういう思いで登場し、それが日本経済にどういう影響をもたらしたかを、現在の若いベンチャー企業家に知ってもらいたいというのが冊子発行の狙いだった。

仲間といっても、当時ベンチャー企業を起こした社長（元社長も）さんが中心だが、各人とも冊子をまとめる編集作業中は、自分らが抱いていた当時の熱っぽい思いを後継ベンチャー経営者に伝えようと、それは熱心だった。

ベンチャー・ブームというと、とかくマネーゲームの様相を呈しがちで、ベンチャー経営者のなかには拝金主義の陰さえ漂う人もいる。しかし、初期ベンチャーの多くは、新しい技術を世に出したいとか、自己実現の手段として起業を選ぶなど、それなりの志を持ってベンチャーを起こし、企業経営に当たったものだった。

企業経営である以上、利益追求の側面

があったのは当然だが、それと同時に志を世に問いたいという熱い思いがあったのである。当時の論文を読み直すことによって、初期ベンチャーの持っていた思いを現在のベンチャー企業家にも共有してもらいたいというのが、私たちの狙ったところだった。

もちろん、当時と現在では時代も環境も違うことは承知している。事業の成功率（株式上場を成功というなら）は現在のベンチャーの方が当時のそれより高いのも知っている。だから、初期ベンチャーの思いを押し付ける気はないし、また押し付けられるものでもないだろう。しかし、日本のベンチャー企業が今後、健全に発展していくためには、初期ベンチャーが抱いた志を今一度、振り返ってみる必要があるのではないかと私たちは考えたのだった。

さて、私事を以上くどくどと書いてきたのには、もちろん理由がある。最近の企業倫理の乱れがあまりにもひどいからだ。報道でご承知の通り、マンションやホテルの耐震強度の偽装問題が波紋を広げている。この小文を書いている時点では、まだ事件の全貌が明らかになっていないが、それにしても渦中の建設

会社や建築士の倫理の乱れは相当なものと言えはしないか。

建築士の偽装は自発的だったそうだが、欠陥住宅を建てる建設会社の建設行為自体が故意かどうかは、執筆時点ではハッキリしていない。とはいえ、お客のことを考えると、欠陥住宅を作り続けて、それを堂々と販売する企業の姿勢をどう考えればいいのか。少なくとも、正当な商品をお客に製造・販売するという企業の最低守らなければならない道（こんなのは倫理以前のことではないか）を踏み外しているのではないか。

世の中でCS（顧客満足）の追求がもてはやされ、CSR（企業の社会的責任）が唱えられているというのに、これではまるで世の中の流れに逆行しているのではないか。こんな甘い姿勢で企業経営が出来るとするなら、庶民（消費者）を泣かせて金儲けする暴力団とどこが違うのだろうか。

少し前には、カネボウの粉飾決算が話題になり、当時の社長らが逮捕された。執筆時点では、前社長がその容疑を認めたと報道されている。明治安田生命保険の保険金不払い問題も問題になった。カネボウは戦前、製造業日本一の名譽に輝いた名門企業だったし、明治安田は三菱グループの一角を占める。日本を代表するこれら大企業の企業倫理の乱れはどうしたことだろう。その姿勢の悪さでは、耐震偽装企業と似たり寄ったりではないか。

もちろん、これら倫理の乱れが一部企業の例外的な不祥事だというのなら、ま

だ救いがある。しかし、こう不祥事が相次ぐ（それも大企業から中堅・中小企業まで）点を見ていると、どうやら日本企業の構造的な劣化が始まっていると見ざるを得ない。冒頭の私事に戻れば、日本企業は経営に当たって、その基礎となる志を失いつつあるのではないか。行き当たりばったりとは言わないが、金儲けのためには少々のことには目をつぶってもいいだろうという姿勢の緩みが出てきたのではないか。

もっとも、耐震偽装といい、粉飾決算といい、保険金の不払いといい、決して「少々のこと」ではない。企業が寄って立つ根本のところでは緩みが生じているのである。あえて、構造的な劣化というのは、そのためである。倒壊する家を作る建設会社、払わない保険金を掛けさせる保険会社。まるでブラックユーモアではないか。

いくら、不況が長引いたからといって、企業の土性骨を劣化させてしまっているいわげがない。IT（情報技術）ベンチャーが株式上場で稼いだ資金を使って、力づくで企業提携を迫るという動きが広がっているが、確かに資本主義の論理に反していないとはいえ、そこに構造的な劣化の兆しを感じてしまうのはこちらが古いせいなのだろうか。

冒頭の私事に戻ると、初期ベンチャーには、少なくとも企業の寄って立つ志があった。企業倫理と言っていい。志の中身はともかくとして、企業経営に際して倫理を守ることの有効性を今一度確認しておく必要があるのではないか。